

日本プロレタリア文学集・35

プロレタリア戯曲集 1

文学集・35

本プロレタリア文学集・35

ノロレタリア戯曲集 **1**

日本プロレタリア文学集・35

プロレタリア戯曲集 (一)

定価 二八〇〇円

一九八八年五月三十日 初版◎

発行者 山 本 功

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷四の二五の六
電話 (〇三) 四二三一八四〇二 (営業)

(〇三) 四二三一九三二三 (編集)
振替 東京 三一 一三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

ISBN 4-406-01617-1 C0393

日本プロレタリア文学集・35

プロレタリア戯曲集

(一)

目次

木下 李太郎

和泉屋染物店……………九

中村 吉蔵

剃 刀……………三

秋田 雨雀

緑の野……………吾

国境の夜……………三

骸骨の舞跳……………六

平沢計七

工場法……………二五

牢から出た男……………二五

藤井真澄

同士打……………二七

倉庫の強人……………二七

長谷川如是閑

食い違い……………二八

渡 平民

木賃宿……………三二

監獄部屋……………三七

佐野 袈裟美

雪を踏んで……………二四一

脱営兵とその妻……………二五〇

混乱の巷……………二五五

武藤直治

蘇らぬ朝……………二七五

小山内薫

奈落……………二七

藤森成吉

磔茂左衛門……………二九二

何が彼女をそうさせたか……………三〇〇

小堀甚二

転轍手……………三〇四

久板栄二郎

犠牲者……………四三

「戦闘は継続する！」……………四六

旗……………五〇

今野賢三

盆踊り占領……………四六

木田 開

壊われ易い玩具……………四七

小野宮吉

早 鐘……………四八

解 説……………菅井幸雄……………四九

発表年月日と掲載文献……………五三

木下 奎太郎

和泉屋染物店（一幕一場）

登場人物

おとせ

おその

おけん

おさい

徳兵衛

清右衛門

幸一

松次郎

義太夫節にて幕あく。

舞台は紺屋和泉屋の内部を現わす。上手は床低き店先、下手は土間。土間には数多くの藍壺並び埋られ

てあり。そこと店の框かまちとの間には叩きの庭ありて奥の方に行くようになりて居る。奥と店との境には紺地に『和泉屋』と染め出したる暖簾のれんが懸かる。叩きの庭に向える框には細木格ほぎわくの四尺障子二枚あり。藍壺の土間の上に電燈あり。また数本の竹竿を渡し、それに色々の糸を懸けてあり。下手は表の大戸となり、戸の前に腰高障子を閉めたり。それより奥は戸袋と壁とにて、その上のところに門口より取り込みたる暖簾のれん揚げたるままに懸る。角の中に泉、その下に『万染物所』右に『和泉屋』と二行に染め出されたり。赤き漆の地に金字にて京染と彫りたる看板も壁に立てかけられてあり。店は後ろに戸棚あり、其あいだに奥の間にゆく半間の障子。奥まりたる所に帳場。その上に電燈あり。柱には時計、神棚には燈明と注連飾しめなざり。戸棚は皆戸をはめたれば、そこそこ小ちんまりと片付きて居る。殊に時は正月元日の夜九時過ぎにして、戸外には昼ごろよりの雪なお降り続き、街道に人声もなく、家の内もまた静かなる心持を現わす。折々雪の崩れ落つる音をきかす。近き鍛冶かの夜業の物音も時々響ききたる。店先にはおとせ、おさい、おけん、おそのの四人、大きな青銅の火

鉢の傍にて話をして居る。あたりに茶道具、菓子鉢、餅を取りたるめいめい皿などあり。今しもおけんは膝より三味線を滑したる所なり。軽き笑声起る。おそのは慎ましく帳場の格子の前に坐りて両手を膝に並べて居る。職人の松次郎は藍壺の上に吊したる竹竿より紺糸を外して両手にかけてはたばたと振い、一把一把ずつ数えて居る。

おけん (二十六歳。小造り。場所風の意気なる身態をして居る。髪はややあだなる丸髻。気さくなれども涙もろき質) ほほほ、もう之れぎりなのです。もう後は知らないの。

おさい (四十六歳。大きな姿勢。同じく寛潤なる性。昔風の古びたる小紋の羽織など着ている。落ち付かざるさまに坐る) はははははは、面白かった。——さあ、私は往こう。こう道草を食つては居られない。——それでもまあ能くそれまでに仕込んだねえ。もうお前位の歳になつては覚えられるものじゃ無いのに。(立ち上る)

おけん まあ、おばさん可いじゃありませんか。御緩り御話なさいな。——でも小さい時に少しでもかじつて置くと違いますわ。——おばさん、まあ貴方は往くのです

か。

おさい もう嚮つから使が幾度家へ来たか知れはしない。その上また、もうここに小一時間も居たのだよ。もう事によると福引はおえてるかも知れない。それでもまあ往つて見よう。じゃ、ねえさん、さよなら。早かつたらまた帰りに寄りますよ。——じゃ、おけんさん、お前さんもまた遊びにお出でなさいよ。

おとせ (五十二歳。瘦せて丈高き方。極端に慎ましき口許。歳よりもやや派手なる昔風の紬の着物をきる。小き丸髻。眉を剃り齒を染めて居る) じゃまたお寄んなさいましよ。——おその大戸を開けておやり。

おその (十九歳。丈やや低く太りたる方。世慣れず、素直なる仕込。僅か恨あるような表情の目許。廂髻。新しき質素なる着物。——庭に下りて、障子の棧にかかりたる、鶯の紋の小さきぶら提灯に燈をとます) はい、じゃ、おばさん。

おさい (黒めりんすのおこそ頭巾を被り、上り口に立てかけた蛇の目の傘をとりて) はい、有り難う、おそのさん、それじゃ後を閉めておくんなさいよ。(おその表戸をあける)

おさい おや外の明るいこと。まるで月夜のようなだね。月

夜に提灯は外聞がわるいと云うけれど、雪の夜だから構うまい。やっぱり点けてゆきましょう。では、ねえさん、さよなら。おけんさん、さよなら。——おやこの家の御飾は滅法に長いこと。何だと思つた、頭の所が——おお寒い。じゃおそのさん、さよなら、お休みなさいよ。（去る）

おその さよなら。（戸を閉し、その前の障子をもしめて戻る）

おけん 富田屋のおばさんは何時も元気がよござんすねえ。——じゃもし弾いて見ましよう。佐和利の所だけでもやっぱり素人にはさわりのところが一番面白うござんすわねえ。——太棹だと好いんですけど——こんな歌三味線じゃ、まるで音なんど出やしませんわ。

おとせ 大へん註文が六つかしいのだね。だつてもうお前、六七年というものは手をつけた事もないのなもの。

おその おつ母さん。そら何時ぞや富田屋のおていさんが帰つてお出での際に、貸して上げたじゃありませんか。

おとせ おや、そう、そう、そうだったねえ。そうだ、それであの時に絃も仕替えて呉れたのだった。

おけん そう？ おていさんが帰つてきたの。私はもう久しく会わない。変つたでしょうねえ。

おとせ もうすっかり。でもお前大そうりゆうとした態をしてお出でだったよ。一時はね、そら、あの人に捨てられて、随分困つた相だったけれど、それでも今じゃ好い旦那を見付けて、此節ではおかみさんで帳場に坐つて居られるのだとき。色々と苦勞した話をして行つたよ。

おけん もうもうそう云えば一昔経ちますものね。世が世ならあの人だつて——お、そう云えばあの菊屋さんもうまゝ行きませんね。

おとせ お前、この三四年というものは、どう云うわけだか毎年毎年不景気で困つてしまふのだよ。去年はまた一層ひどくてね。（間）松つあん。おい、松次郎。お前ももうお仕舞いよ。何、この雪じゃ——明日だつてやみっこはありやしないのだから。之じゃ明日の初売も駄目だねえ。

松次郎 そうですけども、岡津屋のあのばあさんはやかましやだから明日屹度来ますよ。

おとせ それだつてお前、此頃のような天気じゃ間に合わないって仕方がないわさ。もうお休みよ。そしてもうこんなに雪が降るのだから、あしたの朝だつて、そんなに早くないって可いのだよ。さあお休み、お休み。台所へ行つて甘酒でもわかつておわがり。

おけん (三味線の調子を合わせながら、気さくに) ねえ、松つあん。紺屋の明後日って昔から言うじゃありませんか。お正月ですもの、もうお休みなさいね。

松次郎 はいもう直ぐです。もうあと少ししか無いのです。

(間)

おけん (松次郎に) お前さんがそんなに働いているのに、此方ではこんなのにんきに三味なんど弾いたりして済まないわね。——あすこの鍛冶屋でも能く精が出ます事ね。元日だのに夜業をしていますよ。——

おとせ やっぱり、明日の仕度だろう。

おけん でもなぜそんなに不景気なのでしょうねえ。

おとせ なぜだか理由は知らないのだがねえ——町の税だの、所得税だのばかりは昔の割に取られて居るのに、もう昔のようにやってはいないのだし——

おけん どこでも不景気不景気って——まあいやですなねえ。何故でしょう。内に居てもね、三味線一つ弾くのもあたり近所へ気兼ねなんですの。いつも困ったような顔をして、まあこう謹慎していないと跋が合わないんですもの。(間。急に笑談らしく) ね、おばさん、そりやそうと、私にもねえ近頃始めていろんな人情や世間のことが分つて来たんですよ。

おとせ (微笑) そりやそうさ。その年齢で分らなくなつてどうするのだえ。

おけん いえ、でもねえ——三味線の歌の文句なんぞもね、もとは唯何のわけもなく歌ったんでしたがねえ。やっぱり歌などと云うものは上手に作つてあるもので御座んすわねえ。

おとせ さあ、前置は後にしてまた歌つてお聞かせよ。お前、こんなのにんきにして、お前の三味線なんかを聞くようなときは滅多にありはしないのだから。お父さんがああ寝てしまつては、私一人で、お前、家のことを何から何までしなけりやならないのだからね。早くおそのに養子でも貰つて後をやつて貰わなくっちゃ私やもうかなわないのだよ。

おけん そういえばねえ、幸さんも——

おとせ だから、さあ、語つてお聞かせよ。

おけん (氣をかえて) じゃ親類の二段聞きでもして貰いましょうかしら。(新口村の佐和利のところを小さい声で語りながら弾く。此間に松次郎は片腕に一ぱいの紺糸をかけて、庭の電燈を消し暖簾をぐぐつて奥の方に去る。外を火の廻りの拍子木が微かに過ぎてゆく。おけん、中途にて文句につかえて手をやめる) さあ、又忘れてしま

ったわ。本をあてにしてまだ文句も覚えられないものだから——親子は一世の縁とやら、それから何でしたかねえ。この世からなるじゃない。何でしたかしら。え、もう休しましよう。忘れてしまった。——何だってそんなに真面目になつて聞いて居るんです。きまりが悪くいじゃありませんか。(時計一つ打つ)

おとせ おや、おその、お前台所へ行つて皆さんにお休みて云つてお出でよ。もう九時半だよ。それでね、もし明日のあさも雪ならば——明日だって休みっこはありやしないよ。そんなに早くなくつても可いってね。六時頃までにお節が祝えさえすりや可いって云つて来ておくれな。それから、もし甘酒がわいて居たらここへ持つてお出でな。

おその (立つて奥へゆく。障子を明けると屏風を立てたる次の間見ゆ)

おけん ねえ、お婆さん、あの事は早くきめてしまった方がよ御座んすのよ。ああ両方で思つて居るのなら娶にやつたて可いじゃありませんか。——そうですよ。確かに思つて居るのですよ。

おとせ だつてお前、幸一は全く当てにならないのだからねえ。

おけん ですからさ。祝言はもつと延ばしたつてそりや可ご座んすわ。幸さんがお帰りになつて、幸さんにお娶さんでも出来てからでそりやよござんすがね、——(やさしく)ね、お婆さん、私やほんとうにそう思いますの、あの年頃に思つた事が一番本当なんですわ。年をとれば考えも変わるつて云うけれども、そんなに人間の考えと云うものは変わるもんじゃなくつてよ。あの頃に思つた事が一番邪念がなくなつて正直なんですわ。もう可いわ、私がどこまでも肩を持つて上げるわ。——私やねえ、お婆さん(膝にねかしたるままに三味線を弄しながら)今になつて見るとつくづくそう思うのよ。お婆さん、私やよっぽど馬鹿でしたのねえ。

おとせ どうしてさ。

おけん だつて——私はよっぽどおぼこだったのね、ちつとも世間の事だの、人情だのつてのが分らなかつたのねえ。

おとせ そうでもあるまいよ、お前は人よりは賢い方だよ。

おけん (笑) そんな事はありやしませんわ。(蓮葉に)随分だわね。——(沈みて)ねえ、お婆さん、私はお婆さんにも済まない事をしましたのねえ。

おとせ 何をさ。

おけん 何をとて。

おとせ お前の云う事はちつとも分りやしないのだよ。

おけん そう。おばさんには分らなくなつて？——そんなら云いますがね、おばさんも幸さんも、私があすこへ娶に

往つたのを好い事には思つては居なかつたでしようね。

おとせ 何がお前、今更そんな古い事を誰が思っているものかね。

おけん でもそうばかりは行かないわ。私にも今になつて見れば色々と思ひ当ることがあるのよ。

おとせ そんなつまらない事はお休しよ。お前それよりかまた歌でも聞かしてお呉れな。

おけん ええ、ええ、それだから、それはもうそれ限ですからさ、幸さんを早く家へ呼んで、好いお婆さんでも貰つて、おばさんだつて、もう樂をなさいますいな。

おとせ 本當に、ねえおけん、そうなつて呉れると私やどんなに嬉しいか知れはしないのだよ。

おけん 私もね、生れ故郷の古い家に、お婆さんだの、おじさんだの中にこうして居た方がどれ程よかつたか知れはしないわ。知らない他人の中で苦勞するよりは。

おとせ 何でそんな老人じみた事を云うのだえ。お前など

は旦那さんが働き者だからこれからずんずん世の中へ出てゆくのだよ。——だがね、今度の事は私にはどうしても氣になつて困るのだよ。ねえ、おけん。どうしたら可いだろうねえ。

おけん 大丈夫よ、お婆さん、私がさつきからあんなに云つてゐるじゃありませんか。そんな事はありやしないわ。

幸さんみたようなああいう人が——

おとせ お前は何にも知らないのだよ。——幸一は昔の幸一じゃないのだよ。

おけん そりや貴方の誤解だわ。

おとせ そうでないよ。事によると——今度だつて、彼がやり兼ねまいものでもないからさ。

おけん だつてそんな理由が無いのでしよう。(間)でも兄さんはもう着きそうなものですのにねえ。

おとせ そうさ。昨日の手紙では確かに今日中には帰ると云つてあつた。都合がよければ幸一をも一遍兎に角一緒に連れてかえると書いてあつたが。

おけん じゃ屹度来るでしよう。もう少し待つてて見ましよう。

おとせ もしや万幸一があゝの事件に係して居たならどうしようねえ。